

## 今週の為替相場見通し(2020年6月22日)

| 総括表      |      | 先週の値動き |                 |        | 今週の予想レンジ        |
|----------|------|--------|-----------------|--------|-----------------|
|          |      | 注      | レンジ             | 終値     |                 |
| 米ドル      | (円)  |        | 106.67 ~ 107.63 | 106.90 | 106.50 ~ 108.00 |
| ユーロ      | (ドル) |        | 1.1169 ~ 1.1353 | 1.1178 | 1.1000 ~ 1.1350 |
| (1ユーロ=)  | (円)  |        | 119.42 ~ 122.08 | 119.42 | 118.00 ~ 122.00 |
| 英ポンド     | (ドル) |        | 1.2344 ~ 1.2682 | 1.2349 | 1.2250 ~ 1.2450 |
| (1英ポンド=) | (円)  | *      | 131.95 ~ 136.36 | 131.99 | 131.00 ~ 133.50 |
| 豪ドル      | (ドル) |        | 0.6777 ~ 0.6977 | 0.6833 | 0.6750 ~ 0.7050 |
| (1豪ドル=)  | (円)  | *      | 72.65 ~ 75.09   | 73.05  | 71.90 ~ 76.00   |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

(1)今週の予想レンジ: 106.50 ~ 108.00 円

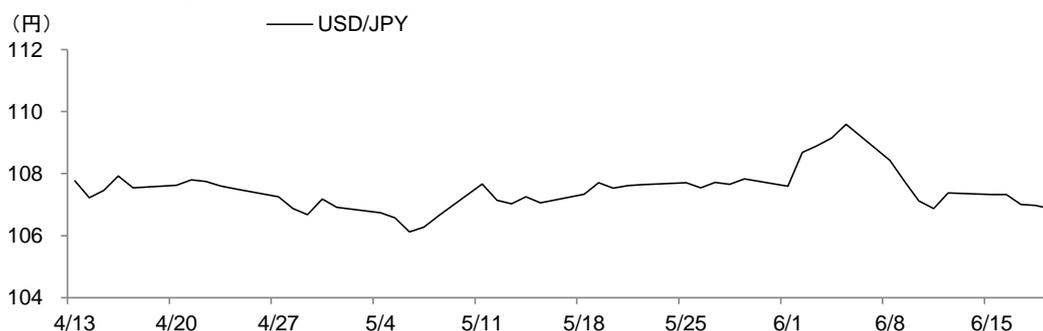
(2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は後半に円高が進む展開。週初15日、107円台前半でオープンしたドル/円は、オープン直後に上昇した局面があったものの、中国や米国で新型コロナウイルス感染拡大第二波への懸念が浮上し、世界的な株安が円高圧力となって上値の重い展開。その後米国時間にかけて、NYダウ平均が値を戻し、FRBが米社債の広範な買い入れを開始すると報道を受けて徐々に値を戻した。16日は、日経平均株価の上昇と日銀金融政策決定会合での資金繰り支援拡大の決定を受けて一時週高値の107.63円まで上昇。米国時間には米5月小売売上高の結果が好感され再度高値に迫ったが、NYダウ平均株価の下落に伴い反落した。17日は、前半は小幅な値動きとなったが、米国での新型コロナウイルスの感染拡大に関する報道や、NYダウ平均の下落と米金利の低下に伴ってドル/円は107円を下抜けた。18日は、前日の流れを受けて上値の重い展開。米国テキサス州やカリフォルニア州での新型コロナウイルス感染者数拡大が連日報じられ一時週安値の106.67円まで下落した。週末は107円付近での推移が継続した。

今週のドル/円相場は106円台からの反発を予想。今週は米国で経済指標の発表が相次いで予定されており、いずれの指標もステイホーム期からの反動による数値の改善が予想されている。これにより、ドル/円については安値からの持ち直しが期待できそう。特に、22日(月)米5月中古住宅販売件数は、中古住宅価格の下落から需要の強まりが指摘されており、販売件数持ち直しの加速に注目されたい。また、26日(金)米5月個人支出については、経済活動再開による反動消費が大きく予想されている(予想:+8.8%、前回:▲13.6%)。一方、リスクは中・端午節を控えたポジション調整によるドル/円の下落。トランプ大統領による新型コロナウイルス拡散批判も去ることながら、木曜日から週末にかけて中国では4日間の連休となる。長期連休に入る前に、ドル売り円買いのポジション調整が強まる可能性があり、ドル/円の値動きは重いものとなるかもしれない。

## (3)先週までの相場の推移

先週(6/15~6/19)の値動き: 安値 106.67 円 高値 107.63 円 終値 106.90 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

(1)今週の予想レンジ: 1.1000 ~ 1.1350 118.00 ~ 122.00 円

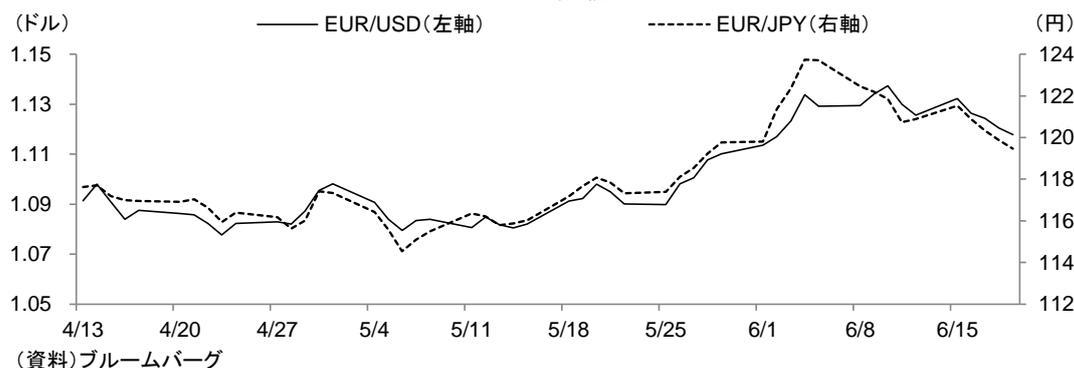
### (2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のユーロドルは、週前半に高値を付けた後、反落する展開。週初、1.12半ばでオープンしたユーロドルは、英首相と欧州委員長のFTA交渉会談を控え、様子見ムード。NY時間に「ブレグジットの移行期間延長はなく、合意に向けて交渉を加速させる」と伝わったことや、FRBの社債購入をめぐるヘッドラインを背景に米金利が下落したことで、ユーロドルは1.13前半まで上昇。翌16日は、好調な米経済指標の結果を受け米金利が上昇。また、米中で新型コロナウイルスの二次感染拡大が懸念されるとドル買い地合いとなり、1.12半ば付近まで軟調に推移。17日、堅調な欧州株を横目に1.12後半まで上昇するも、節目の1.13を前に反落。その後、米金利の下落を背景にドルが売られたことや、米株に比べて欧州株が堅調に推移したことで、ユーロドルは1.12半ばまで値を戻した。18日、前日に続き米金利の軟調な展開にユーロドルは1.12付近まで下落。1.1200がサポートラインとして意識され反発する場面も見られたが、感染第二波への懸念が高まる中、リスクオフのドル買いが入り、1.12を割り込むと、ストップロスを巻き込みながら1.1186まで下落した。週末は、復興基金協議への期待感が高まったことやドルが弱含んだことで、1.12半ばまで上昇。しかし、基金の規模や配分に関して合意に至らなかったことが材料視され、ユーロドルは反落。週安値となる1.1169をつけ、1.1178でクローズ。

今週のユーロは下落リスクに警戒したい。新型コロナウイルスの二次感染拡大懸念によって、市場のセンチメントは悪化している。3月に見た急激なボラティリティの上昇やドルへの過剰な需要の高まりは見られていないものの、コモディティ価格の下落を伴った有事のドル買いによって、ユーロドルは軟調地合いとなっている。6月上旬に起きた米でのデモ騒動を、外から見ていた筆者が思ったことは、マスクを着用していない参加者らによる感染第二波の到来である。ちょうど2週間程度が経過した今、感染者数が増加することが予想され、市場心理が大きく改善する蓋然性は低く、有事のドル買いは根強いであろう。重要指標は、23日「仏6月総合PMI(速報値)」、「独6月製造業PMI(速報値)」、「ユーロ圏6月総合PMI(速報値)」、「英6月総合PMI(速報値)」、24日「独6月IFO企業景況感」が予定されている。

### (3)先週までの相場の推移

先週(6/15~6/19)の値動き: (対ドル) 安値 1.1169 高値 1.1353 終値 1.1178  
(対円) 安値 119.42 高値 122.08 終値 119.42



### 3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.2250 ~ 1.2450 131.00 ~ 133.50 円

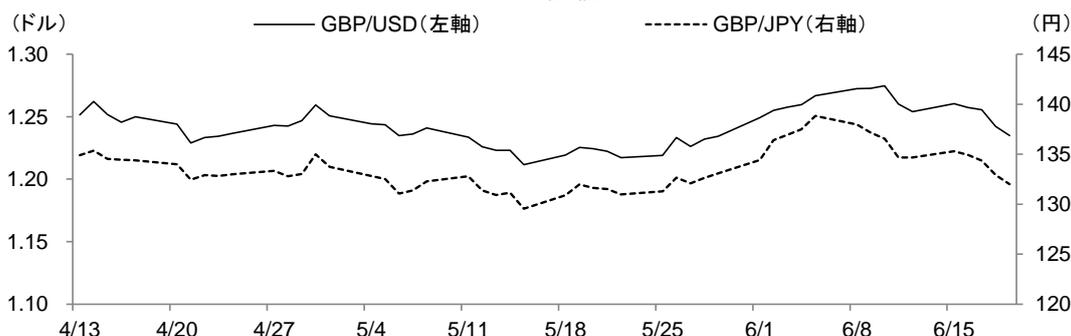
#### (2)ポイント【先週末までの回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、主要通貨(ドル、円、ユーロ)に対し、全面高が先行したものの、16日中に週の高値を打ち、その後は週引けまで一貫した軟調推移を続け、週を振り返って、それぞれ、小幅水準を切り下げた。注目された、15日の英EU首脳会談では、ジョンソン英首相が、あらためて(20年末に期限の来る)移行期間延長を拒否したものの、将来関係を巡る交渉については、7月~9月の集中交渉継続を「確認」した(ただし、ジョンソン首相は、『7月中の合意も不可能ではない』などと強気の姿勢を強調している)。同日のポンド堅調は、6月末で同交渉が打ち切られるリスクが払拭されたことを好感した反応と受け止めることができたのではないかと見られる。英中銀金融政策委員会は、18日、基準金利の0.10%据え置きと資産購入額上限の1,000億ポンド引き上げを発表。一連の決定は事前の予想通りだったものの、前後してポンドは下げ足を加速。この局面の反応から、16日以降、18日に前後したポンド軟調推移が、英中銀による追加「金融緩和」の可能性/決定を材料視した可能性も考えられた。他に、この間発表された英経済指標では、16日に発表された英雇用統計は、ILO基準の2~4月失業率が市場予想よりも低かった一方、社会保障受給ベースの5月失業率が大きく上振れる交錯した内容、17日の英5月CPIは概ね市場の予想に沿った内容、19日の英5月小売売上高は予想を明確に上振れた。ただし、ポンドが最も敏感に反応したのは、従来は市場の関心が低かった英5月財政収支の大幅悪化。5月財政赤字は昨年同月の6.7倍に膨れ上がり、「債務が1963年来初めてGDP比100%を超えた」などという分析が現地メディアなどでも報じられた。この数字を受け、ポンドは続落し、特に対ユーロでは3月末来の安値を更新する0.90715まで下落した。

今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた横ばいを予想。仮に値幅が出るとしたら、下振れ方向を警戒する。過去3か月ほどのポンドの値動きを振り返ると、大きな流れとしては結局横ばいで、対ドルで1.2250~1.2650、対円で132円~136円あたりをコアレンジに推移してきたように見える。そういう目線で見れば、6月頭の上振れも、単に、(6月末の将来交渉決裂を懸念した)5月央の下振れの反動だったと位置づけることができよう。足元は、再び下振れ局面に向かいつつあるのかもしれないが、仮に、この間、英中銀による資産購入増額や財政赤字拡大をポンド売り要因と読んだのだとしたら、長続きする可能性は低いものとする。英中銀が今のペースで資産購入を続けられれば、6月中にも上限に到達するのはわかっていたことで、そういう意味で、資産購入増額と財政赤字拡大は同根(コロナ対策費用の捻出)だし、同じ構図は世界中のどの国も抱えているからだ。EU離脱後の将来関係については、英報道では、ここにきてさまざまな具体案が飛び交うようになった。先週末、EU側のバルニエ主席交渉官が漁業権で譲歩する(漁業割当量を年次交渉とする)姿勢を示唆した(16日)とか、規制/基準の統一については、英側から、(現状維持=完全に一致を出発点に)英が規制に同調しない権利を「保持」し、その権利を「行使」した場合には関税賦課の対象になることを甘受するという妥協案を提示した(18日)などといった観測が聞かれた。一見、交渉に進展があったようにも見えるが、おそらく、9月ぎりぎりになるまで実際の進展には結びつかないだろうし、そもそも、コロナ禍動向/同対策との比較で、同交渉に関する観測が、金融市場で注目を集める可能性は低いのではなかろうか。敢えて下振れを警戒する理由は、対ユーロで12週間ぶりの安値を更新したり、対円で(上述コアレンジの下限である)132円割れが目前だったりというテクニカルな要因があるだけに過ぎない。

#### (3)先週末までの相場の推移

先週(6/15~6/19)の値動き: (対ドル) 安値 1.2344 高値 1.2682 終値 1.2349  
(対円) 安値 131.95 高値 136.36 終値 131.99



(資料)ブルームバーグ

## 4. 豪ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 木村 優太

(1)今週の予想レンジ: 0.6750 ~ 0.7050 71.90 ~ 76.00 円

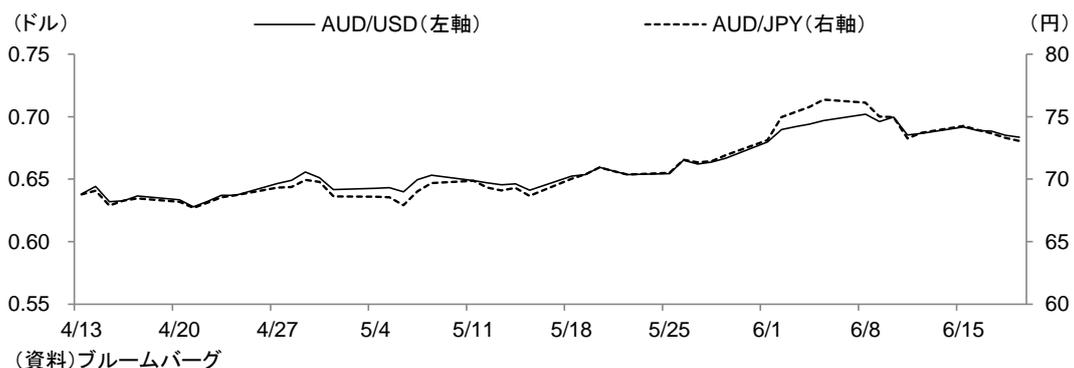
### (2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、週前半に急速に豪ドル買いが進行するも、週後半は経済指標の軟調さが意識されて軟調推移となり、週を通して往って来いの展開となった。週初15日 0.6826で取引開始し、東京時間は新型コロナ第二波への懸念によるリスクオフ地合に加え、モリソン豪首相が今年と来年の財政赤字が過去最大となるとの見通しを示したことで豪ドルも週最安値の0.6777まで下落する。しかし海外時間に入りFRBが米広範な社債の買い入れを発表し、米株の3指数がプラス転換したことがサポート材料となり、豪ドルは0.6920近辺まで反発した。16日は公表された豪州準備銀行(RBA)6月金融政策会合議事要旨の内容が景気下押しが当初想定より小規模となる可能性を言及した上で緩和的なアプローチを継続すると表明したものであったため豪ドル買いが継続し、週高値の0.6977まで上昇。その後米国や中国での感染第二波への警戒感から一時0.6834まで下落するも、米株や米金利の持ち直しが支えとなり0.6890付近で落ち着く。17日は材料に乏しく小幅な推移となったが、第二波への警戒感からリスクオフの豪ドル売りが優勢となり、0.6880付近まで小幅に下落。18日には豪5月雇用者数変化と失業率が市場予想を大きく下回ったことが投資家心理を冷やし、0.6850近辺まで大きく下落。その後一旦買い戻されるも、世界的な新型コロナ感染者増加懸念に下押しされ0.6840付近まで下落。19日は発表された豪5月小売売上高が前月比16.3%増となったことにサポートされ、一時0.6900近辺まで上昇したが、前日の軟調な雇用統計による早期景気回復への期待感の後退が上値を抑え、0.6833まで反落しての越週となり、週前半の上昇分をほぼ打ち消す形となった。

今週の豪ドル相場は軟調な推移となることを予想する。経済活動再開を好感したリスク選好の動きにより、原油価格との相関性が高い資源通貨である豪ドルは6月に入って一段と上昇し、コロナショック前と同水準まで回復した。これ以上の上昇を展望するにはさらなるリスクオンの材料が必要となるが、新型コロナ感染第二波の懸念が強まる現状を踏まえるとそれは想定しづらい。一方下落リスクとしては豪中関係の悪化が懸念される。4月にモリソン豪首相が新型コロナの発生源の調査が必要と言及したことに対し、中国は豪州からの輸入品に大幅関税をかけるなどの報復措置を実施。先週もモリソン豪首相が豪州の政府機関にサイバー攻撃の被害事例があることを明らかにしている。先週はモリソン豪首相の中国に対する強硬姿勢が目立ったものの、相場への影響は限定的であったが、さらなる報復措置が発表されると豪ドル売りが急速に進行する可能性もある。これらを鑑みると、当面は豪中関係悪化を懸念してリスクオフの戻り売りが優勢になると予想する。

### (3)先週までの相場の推移

先週(6/15~6/19)の値動き: (対ドル) 安値 0.6777 高値 0.6977 終値 0.6833  
(対円) 安値 72.65 高値 75.09 終値 73.05



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。